

「グリーンズリーヴズ」について

桜井雅人

しばしば代表的な「イングランド民謡」とも言われて親しまれてきた「グリーンズリーヴズ」(Greensleeves)⁽¹⁾という歌の時代的に最も古い記録は、リチャード・ジョーンズ(Richard Jones)なる出版業者が1580年9月3日付でロンドンの書籍出版業組合(Stationers' Company)に登録したものとされており、それによると「グリーンズリーヴズ夫人の新しい北部の小唄」(A newe north-e[r]n Dittye of ye Ladye Greene Sleeves)とその題名のみが記されている。そして、この組合の記録によると、それから一年足らずのうちにさらに6種の「グリーンズリーヴズ」⁽³⁾が登録された。

(1) 1580年9月3日「グリーンズリーヴズ夫人から友人のドンキン(Donkyn)への答」

(2) 同年9月15日「聖書に合わせて道徳化されたグリーンズリーヴズ。罪深き人に授けられた神の様々な恩恵と祝福を示す」

(3) 同年9月18日「グリーンズリーヴズと落着き。グリーンズリーヴズは落着いている」

(4) 同年12月14日「国中でいちばん美男子(the boniest lasse in all the land)と始まるグリーンズリーヴズの楽しい新しい北部の歌」

(5) 1581年2月13日「ウィリアム・エルダートン(William Elderton)によるグリーンズリーヴズの非難」

(6) 同年8月24日「緑の袖はすり切れて／黄色の袖はぼろぼろに／黒い袖には恨みを抱く／だが白い袖は私の喜び」(Greene Sleeves is worne awaie, Yellowe Sleeves Comme to decaie, Blacke Sleeves I holde in despite, But White Sleeves is my delighte.)

このように、次々と作り変えられているところからみると、比較的短い期間のうちに大いに流行したものと考えられる。

歌詞がはじめて記録されたのは、1584年刊行されたクレメント・ロビンソンほかによる『手一杯の楽しい喜び』(A Handefull of pleasant delites, by Clement Robinson, and diuers others)⁽⁴⁾とされている。これは先ほどのリチャード・ジョーンズが出版した当時のブロードサイド・バラッド集であり、ここに収められた「グリーンズリーヴズ」は1580年に登録したものと同じものであろうと推測される。この本の標題紙をみるとその標題の下に次のような文句が記されている。⁽⁵⁾

種々の詩文によるいろいろな新しい抒情詩と楽しい物語詩を含む／現在はやっている最新の旋律に合わせて歌えるように新しく

作られている、どの詩にもそれに合った適切な旋律がきちんと示されている／ある種の歌には追加を付けて、今まで普通には知られてもおらずこれまで使われもしなかった最も新しく作られた調べに合わせて

しかし、この謳い文句は文字通りに受け取るわけにはいかない。というのは *HPD* に収められた歌はすべてブロードサイドにあったものばかりであり、新しく作られたものではないと推定されるからである。また「新しい」(new) などという言葉が多用されているが、*HPD* には「旧版」があったと考えられ、単なる宣伝文句として「新版」であることを強調したものとみられる。その「旧版」も、しばしば伝えられるような『楽しい抒情詩』(*Pleasant Sonnets*, 1566) とは別のものが 1566 年に出されていたらしい。いずれにせよ、「グリーンスリーヴズ」の歌詞としては *HPD* のものが最も古いものであることには変わりがない。

さて、*HPD* にある「グリーンスリーヴズ」の内容であるが、まず「グリーンスリーヴズ夫人の新しい宮廷風の抒情詩。グリーンスリーヴズの新しい節に合わせて」(A new Courtly Sonet, of the Lady Green sleeues. To the new tune of Greensleeues.) という注記があり、

Greensleeues was all my ioy,
Greensleeues was my delight:
Greensleeues was my hart of gold
And who but Ladie Greensleeues.

グリーンスリーヴズは我が愉しみのすべて
グリーンスリーヴズは我が喜び。
グリーンスリーヴズは我が大切な心
グリーンスリーヴズを除いては他に誰が
りえようか。

というリフレインのもとに全部で 18 のスタ

ンザが示されている⁽⁹⁾。それは、まず次のように始まる。

Alas my loue, ye do me wrong,
to cast me off discourteously:
And I haue loued you so long,
Delighting in your companie.

I haue been readie at your hand,
to grant what euer you would craue.
I haue both waged life and land,
your loue and good will for to haue.

ああ我が恋人よ、あなたはひどいことをする、

つれなく私を見捨てるとは。

これまでずっと愛を捧げ、

共にいることに喜びを感じていたのに。

あなたが求めるものなら何でも

すぐに与えようとしてきた。

愛と好意を得るために

生活も土地も賭けてきた。

そして、「衣服・宝石・馬などを与え、自分の家来を仕えさせてきたのに、それでも情をよせてくれない。私が死ぬ前には愛してくるように神に祈ろう。お別れだが、自分こそ本当の恋人なのだ。」という内容の歌詞が続く。自分としては身も心も捧げているのにそれに答えようとはしない相手に向かって、「あなたはひどいことをする」と言いながら、切々たる胸の内を未練たっぷりに歌っている⁽¹⁰⁾のである。ブロードサイド・バラッドと言っても、それほど物語性があるわけではなく、むしろ単なる抒情的恋愛歌謡とでも呼ぶほうが適切である⁽¹¹⁾。

ところで、「グリーンスリーヴズ」とは文字通りには緑色の袖を身につけた女性ということなのだが、いったいどのような女性であろうか。*OED* は単に「無節操な恋人」(an inconsistent lady-love) と注しているだけ

だが、第 1~2 連のみを見ていると庶民の目からみた宮廷恋愛風の歌と解せないこともない。⁽¹²⁾ また、この女性の「緑色の袖」とは何を意味しているのであろうか。グリーンスリーブズの身につけるものとその色彩をみると、肌着 (smock) は白 (both faire and white), 帯 (girdle) は赤 (red), 絹の長靴下は濃い赤 (crimson), パンプス (pumps) は白, ガーター (garters) には金色のふさ飾りがあり, 垂れ飾り (aglet) は銀である。そして, 上着は第 9 連でこう歌われている。

Thy gown was of the grossie green,
thy sleeues of Satten hanging by:
Which made thee be our haruest Queen,
and yet thou wouldst not loue me.

あなたの上着は草緑色だった。⁽¹³⁾

それにサテンの袖が下がっていた。
それでこそ収穫祭の女王様。
それなのに愛してくれようとしなかった。

この歌には、他にもう一箇所、第 12 連に緑の衣服がでてくる。

My men were clothed all in green,
And they did euer wait on thee:
Al this was gallant to be seen,
and yet thou wouldst not loue me.

私の家来は緑づくめの衣服を着ていた。
そしてあなたに仕えていたのだ。
これはきらびやかな見物だった。
なのに愛してくれようとしなかった。

緑の服を着た男と言うと、ロビン・フッド (Robin Hood) とその仲間たちのことが思いおこされる。さらに、伝承バラッドなどでは、緑色の服は伝統的に妖精 (fairy) など超自然的な生き物のものとされており、また緑は不吉な色でもある。⁽¹⁴⁾ 歌人トマス (Thomas Rymer) を連れ去った仙女も、「小さな小さ

な男」(The Wee Wee Man) の妖女たちも、「クラーク・コルヴィル」(Clerk Colvill) の人魚 (mermaid) も、みな衣装は緑である。⁽¹⁵⁾ もちろん、民謡や俗謡において必ずしも上記のような意味合いを備えているわけではないが、チャイルドの『伝承バラッド集』⁽¹⁶⁾ だけでも 300 箇所も緑の衣服が出てくるし、「グリーンスリーブズ」も何かしら妖女的な姿を彷彿させる。また、様々な衣類 (身につけるもののほとんどすべて) を買い与え、さらに第 3 連後半で

I kept thee both at boord and bed,
Which cost my purse wel fauouredly,

お前に食事と宿泊するところを与えて
ずいぶんとお金がかかったのだ。

などと言うところをみると、グリーンスリーブズは単に恋愛の対象というばかりでなく、衣食住すべての面倒を見ていた「困い者」であって、主人公はそれに入れあげていたのに厭きられてしまったようだ。金の切れ目であったのかもしれない。

ここで、音楽面に目を向けよう。チャペルによると、エドワード・ギルピン (Edward Guilpin) は『スキアレシア、または真実の影』(Skialethia, or a Shadow of Truth, 1598) の中で「その最後の行はハリー (ヘンリー) 王の御世に作られた/ローンの領主の古謡のように」(Yet like th'olde ballad of the Lord of Lorne, /Whose last line in King Harries days was borne.) と言っており、この「ローンの領主と偽の執事」(The Lord of Lorne and the False Steward) (1580 年 10 月 6 日登録) というバラッド (Child no. 271) は「グリーンスリーブズ」の節で歌われたことから、「グリーンスリーブズ」の旋律はヘンリー (8 世) の時代に作られた、と指摘されている。⁽¹⁷⁾ しかし、HPD

には楽譜ではなくその旋律の名称だけが示されているのみではあるが、そのいくつかはダンス曲であり、残りのものもだいたい「外国起源であることが多く、またしばしば大陸の器楽家たちがはじめて修めた音楽スタイルによったダンス曲に由来する」とされている。⁽¹⁸⁾そして、「グリーンズリーヴズ」も「その旋律の低音部は「昔のパスサメッツォ（舞曲）」（*Passamezzo antico*）であり、これはイタリアの16-17世紀の一群のそのような調べのバツソ・オスティナート（固執低音）の曲である」⁽¹⁹⁾と言われる。そして、あとにも述べるように、このダンス曲としての伝統は20世紀にまで続くのである。ところで、シェークスピアが『ウィンザーの陽気な女房たち』（*The Merry Wives of Windsor*）の中で、

それら〔彼の気質と口に出して言うこと〕は「グリーンズリーヴズ」の曲に合わせて歌う「詩編第100番」⁽²⁰⁾みたいにまったく一致していないのよ。（II. i. 63）

じゃがいもの雨を降らせよ。「グリーンズリーヴズ」の曲に合わせて雷を鳴らせ。はっか玉の雹を降らせ。ヒゴタイサイテの雪を降らせよ。（V. v. 20-23）

と言及していることはよく知られている。この場合、歌詞の内容に関するものと解する向きもあるのだが、⁽²¹⁾はっきりと“to the tune of ‘Green Sleeves’”と言っていることだし、その曲にのみ言及していると理解すべきだ。つまり、「グリーンズリーヴズ」の曲は現在のようにゆったりとしているのではなく、かなり快活でむしろ荒々しく演奏されたダンス曲であったようである。

この曲がはじめて印刷に付されたのは1686年にプレイフォード（John Playford）が出版した舞踊曲集『ダンス教師』（*The Dancing Master*）の第7版で「グリーン・スリ

ーヴズとプディング・パイ」（*Green-Sleeves and Pudding Pies*）と題されたものとされているが、⁽²³⁾ダウランド（John Dowland, 1563-1626）のリュート曲の草稿、⁽²⁴⁾ウィリアム・バレット（William Ballet）の自筆原稿の『リュート曲集』（*Lute Book*, 1594）に残されている。⁽²⁵⁾現在「グリーンズリーヴズ」として広く知られている旋律はウィリアム・バレット版（あるいはそれを若干修正したもの）である〔これをA曲と呼ぶことにする〕。しかし、ウィリアム・チャペルが1859年に「現在最もよく知られている旋律の版」と言っているものは、このA曲ではなくてジョン・ゲイ（John Gay）の『乞食オペラ』（*The Beggar's Opera*, 1728）で「法律はあらゆる身分のために作られた」（*Since laws were made for ev'ry degree*, III, xiii）⁽²⁸⁾という歌詞で歌われる旋律であり、これは先ほどの『ダンス教師』の系列に入る版である〔これをB曲と総称する〕。⁽²⁹⁾このことを考え合わせると、17~19世紀には（もしかすると16世紀から）「グリーンズリーヴズ」の旋律とは、むしろこのB曲を指していたのであって、A曲は19~20世紀に非民俗的・非大衆的伝統（つまり文献資料など）から復活したものであると結論づけられる。

ここで、現在最も一般的に歌われていると思われる「グリーンズリーヴズ」の歌詞を見ることにしよう。1956年から1971年までに出版された9種類の歌集に⁽³⁰⁾あたってみると、まずリフレインの部分だけをみてもHPDと同一のものはない。つまり、その最後の行はすべて

And who but *my lady Greensleeves*.

となっている。⁽³¹⁾特に相異の大きい

Greensleeves is my delight,
Greensleeves is all my joy,

Greensleeves is my heart of gold,
And who but my lady Greensleeves?

というものもある。⁽³²⁾これは、ロビンソンの原本自体が長い間ほとんど知られておらず、書き写されるときに変わってしまったものであろう。チャペルの『昔の民衆音楽』や OED でさえもロビンソン版と称してはいるが、⁽³³⁾そこに示されている歌詞はこの変更版のほうである。また、前述したように、HPD には全部で 18 連あったのだが、これをすべて収めているものはこれらの歌集にはない。最も多いもので 11 連であり、⁽³⁵⁾たいていは 3~6 連中には 1 連のみというものもある。⁽³⁶⁾特に、HPD の第 6, 第 8, 第 10, 第 16 の各連はどの歌集にも収録されていない。なお、HPD の第 17 連の前半と第 18 連の後半とで 1 連を形成しているものがある。⁽³⁷⁾これとは逆に、HPD にはない歌詞が一部の歌集に含まれている。特に

If you intend thus to disdain,
It does the more enrapture me,
And even so, I still remain
A lover in captivity.

このように侮るつもりなら
それだけ私を狂喜させるのだ。
そして私はいまだに
囚われの恋人でいるのだ。

は 3 種の歌集にあるところを見ると比較的知られているものらしい。また 1 種のみのだが⁽³⁸⁾

Alas, my love, that you should own
A heart of wanton vanity,
So I must meditate alone
Upon your insincerity.

ああ、我が恋人よ、あなたは
気まぐれな虚栄の心を持っている。
だから、あなたの不誠実さを

私はひとりで黙想しなくてはならぬ。

という歌詞もある。残りの部分は HPD と
だいたい同じと言ってもよいのだが、やはり
語句が若干相違している部分が見られる。
たとえば、第 1 連はほとんど “you do me
wrong” である。また、一部の歌集にのみで
あるが、第 1 連第 2 行目が “so discourteously”
というもの、⁽⁴⁰⁾第 3 行目が “when I have
loved you” というもの、⁽⁴¹⁾第 2 連第 3 行目の
“waged” が “wagered” になっているもの、⁽⁴²⁾
第 7 連第 1 行目の

Thy purse and eke thy gay guilt kniues,

あなたの財布とあてやかな金色の小刀

が “agy” となっておまけに注 (“agy, aged,
old”) までついているもの、⁽⁴³⁾などがある。

このように、歌集ごとにいろいろな違いがあるのにもかかわらず、残りの部分の歌詞はきわめて画一的であって、物語性がそれほど強くないにもかかわらず連の順序が逆転していることもない。また、この種の類似は口頭伝承 (oral tradition) による民謡には一般に見られないものであって、⁽⁴⁴⁾いわゆる文献伝承 (written tradition) の特徴を示すものである。

「グリーンズリーヴズ」の旋律には、この他にも、16 世紀から現在に至るまで内容を異にした多くの歌詞が作られている。たとえば、ピープス (Samuel Pepys) の日記 (1660 年 4 月 23 日) に言及のある「かじ工」(The Blacksmith) 別名「だれもそれを否定できない」(Which Nobody Can Deny), 1642 年に印刷された「元旦のカロル」(Carol for New Year's Day) 別名「聖歌隊のカロル」(The Waits' Carol), 先にあげた『乞食オペラ』の挿入歌、ラムジー (Allan Ramsay) が『茶卓の雑歌集』(Tea-Table Miscellany, 1724) に発表した「汝、美しき人たちを不

眠で守る者どもよ⁽⁴⁵⁾ (Ye watchful guardians of the fair), ダーフィ (Thomas D'Urfy, 1653-1723) の『憂鬱一掃の丸薬』(*Pills to Purge Melancholy*, 1719-20) にある「女王様への抒情的なごあいさつ」(Lyrical Address to the Queen), トマス・ムーア (Thomas Moor) が『アイルランド旋律集』(*Irish Melodies*) にのせた「私たちの世界があれば」(Oh, could we do with this World of ours), ディックス (Chatterton Dix, 1837-98) 作詞の讚美歌「この子は誰だろうか」(What Child is This), 米国映画『西部開拓史』(*How the West was Won*, 1962) の主題歌「牧場の家」(Home in the Meadow) などは中でも有名なものである (なお最後の2つは A 曲)。ただし、旋律が「グリーン・スリーブズ」ということ以外には、何ら内容的な関連性はない。

先ほどふれた「グリーン・スリーブズとブディング・バイ」の系列に入るものは、特に言及しておく必要がある。内容的には HPD と関係はないのだが、「グリーン・スリーブズ (緑の袖)」のことは含み、単に「グリーン・スリーブズ」と呼ばれることもあるし、最初に旋律が印刷されたものであるし、またいろいろな歌を派生させてもいるからである。この旋律についてバーシーは『古英詩拾遺集』の中で

王制復古の時には、ラテン語の礼拝における最も好まれた讚美歌の節に合わせて庶民が歌うように、ばかげて卑猥な歌が作られたということはスコットランドで容認されている伝統なのである。「グリーン・スリーブズとブディング・バイ」(これはカトリックの聖職者をあざけるために作られた) はこのような変形された讚美歌の一つであり、「マギー・ローダー」(*Maggie Lauder*) および「恋人ジョン・アンダソン」(*John Anderson my jo*)⁽⁴⁶⁾ もそうである。

と言っている。もちろん、すでにみてきたように、もとは讚美歌であったという記述は正しくないのだが、替え歌に用いられる旋律としては恰好なものだったようだ。たとえば、ボズウェル (James Boswell) が記録したジャコバイトの歌のように政治的な歌に転用されることもあった。⁽⁴⁷⁾ (以下訳文省略)

Green sleeves and pudding pies,
Tell me where my mistress lies,
And I'll be with her before she rise,
Fiddle and aw' together.

May our affairs abroad succeed,
And may our king come home with
speed

And all pretenders shake for dread
And let *his* health go round.

To all our injured friends in need,
This side and beyond the Tweed! —
Let all pretenders shake for dread,
And let *his* health go round.

第1連と第2~3連との関連がはっきりしないのは、第1連が伝承的なもので第2~3連が新しく作られたものであることによる。⁽⁴⁸⁾これが、ハード (David Herd) では、

Green sleeves and yellow lace,
Maids, maids, come marry apace!
The batchelors are in a pitiful case
To fiddle a' the gither.

となり、バーズが“Green Sleeves”と題している歌は

Green sleeves and tartan ties
Mark my truelove where she lies;
I'll be at her or she rise,
My fiddle and I thegither.—
Be it by the chrystal burn,

Be it by the milk-white thorn,
I shall rouse her in the morn,
My fiddle and I thegither.—

である。これらはすべて「グリーン・スリーヴズとブディング・バイ」と基本的には同じ歌であり、民俗的な伝承の要素も含んでいるものと思われる。

さて、このように見てくると、「グリーン・スリーヴズ」は昔の流行歌謡と言い切ってもよさそうだが、広い意味での「口頭伝達」(oral transmission)と無関係でもない。「広い意味」というのは音楽面に関することであり、習慣的にやってみせてそれを模倣する行為を含むので「口頭的」(oral)と言うよりは「聴覚的」(aural)と言うほうが正確だが、その含みを認めておくということである。つまり、旋律のほうは伝承されてきたのであって、たとえば、ドーチェスター(Dorchester)で1906年に採録された「おお、羊飼いや」(O Shepherd, O Shepherd), 1838年の手稿から発見された旋律、モリス・ジグ(morris jig)の「バック・パイプス」(Bacca Pipes)の伴奏音楽などが民俗音楽としての「グリーン・スリーヴズ」の19~20世紀の姿⁽⁵¹⁾である。これらは、基本的にはB曲から派生したものであって、かなり変化もしており、拍子やモード(mode)なども異なっているものもある。また、ダンス曲として使われてきたことは興味深い。しかし、それは曲にだけのものであって「おお、羊飼いや」の歌詞はまったく関係がない。

これまで見てきたように、「グリーン・スリーヴズ」は、民俗学的な規準による「民謡」には相当しないし、また必ずしもイングランドに限定されてもいない。一般の語法によれば、古くて、作者も不明で、一般庶民の作ったもの、言い換えれば「民衆の、民衆による、民衆のための歌謡」ならば「民謡」とみなす

ことになろうが、時代的な古さや作者不明ということは十分条件でもなければ、また必要条件でもないことがある。少なくとも最も基本的な「口頭伝承」という定義にあてはめれば「グリーン・スリーヴズ」は民謡ではないと言い切ることができる。しかし、400年近くも歌われてきたという事実をみると、単なる流行歌謡や俗謡ではなくて、むしろ「スタンダード」あるいは「国民的歌謡」(national song)とでも呼んだほうが適切であろう。ただ、その魅力の大半は旋律にあることが明らかであり、しかもその旋律も流行歌謡としても民謡としてもB曲をもとにしており、A曲はむしろ非民衆的・非民俗的旋律であったようだ。

註

1. このほかに、Green-sleeves, Green-Sleeves, Green Sleevesなどの表記があるが、Greensleevesが最も一般的である。なお、あとでふれる「グリーン・スリーヴズとブディング・バイ」は文字通りの意味なのでgreen sleevesである。
2. William Chappell, *The Ballad Literature and Popular Music of the Olden Time* (1859; rpt. Dover, 1965), I, p. 227; Hyder E. Rollins (ed.), *A Handful of Pleasant Delights (1584)* (1924; rpt. Dover, 1965), p. 90; C. H. Firth, "Ballads and Broad-sides," in *Shakespeare's England* (Oxford U. P., 1916), II, pp. 518-19; James J. Fuld, *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk* (Crown Publishers, 1966), p. 216; *OED*, s. v. Green-sleeves.
3. H. E. Rollins, *loc. cit.*
4. 注(2)をみよ。
5. H. E. Rollins, p. 1にあるファクシミリによる。
6. 原文は "new Sonets and delectable

- Histories”である。この sonnet と history をこのように訳してはおいたが, Charles Read Baskerville によると “These were common terms for the ballads of the cultured which represented conventional love poetry and classic themes.” (*The Elizabethan Jig and Related Song Drama*, 1929; rpt. Dover, 1965, p. 31) である。
7. Rollins, pp. x-xv. それゆえ Rollins は編著の標題にわざわざ (1584) を付け加えている。
 8. あとでみるように, 「夫人」というよりは「恋人・愛人」としたほうがよいかもしれない。
 9. *HPD* の引用は特記なき場合は Rollins による。なお, V. de Sola Pinto and A. H. Rodway (eds.), *The Common Muse* (1957; Penguin Books, 1965) にはこの “Greensleeves” が Rollins から転載されているが, 綴りなどを現代風に改めたりしている。
 10. 当時のマドリガルでは, たとえば John Wilbye の「むごい恋人に」(Cruel, behold my heavy ending) のように, 片思いの相手に恨みつらみの言葉をはくものが多いようだ。
 11. F. J. Child が編纂した8巻本の *English and Scottish Popular Ballads* (1857-58) にはこの “Greensleeves” が含まれていたらしいが, 1882-98 年の決定版には収められていない。あまり物語性がないこととブロードサイドであることの二重の理由によるのであろう。
 12. たとえば, 中村敬氏は「好きな女性^{レディー}に対する献身の歌である」として宮廷恋愛と結びつけている (『イギリスのうた』研究社, 1973, pp 7-13)。
 13. “grossie” については “Dialectic for ‘thickish,’ ‘luxuriant’; or perhaps a misprint for *grassie*” (Rollins, p. 90) という二様の解釈ができるが, *The Common Muse* と同じく後者を探った。なお伝承バラッドでは green の比喻には grass が結びつくものと決まっている (George Clinton Densmore Odell, *Simile and Metaphor in the English and Scottish Ballads*, 1892; rpt. n. p., n. d., p. 40)。
 14. Lowry Charles Wimberly, *Folklore in the English & Scottish Ballads* (1928; rpt. Dover, 1965), pp. 175-78, 240-43; Francis James Child, *The English and Scottish Popular Ballads* (1882-98; rpt. Dover, 1965), II, pp. 181-82; 原一郎『バラッド研究序説』(南雲堂, 1975), pp. 76-78; cf. 土居光知『神話・伝説の研究』(岩波書店, 1973), pp. 8-9.
 15. ガウェイン (Gawain) が戦った相手の緑の騎士 (the Green Knight) あるいはスコットランド昔話の “Green Sleeves” (K. M. Briggs, *A Dictionary of British Folktales in the English Language*, I, Routledge & Kegan Paul, 1970, pp. 296-97) も超自然的能力を持っている。
 16. L. C. Wimberly, p. 178.
 17. Chappell, *Popular Music of the Olden Time*, I, p. 228. ただし Bertrand Harris Bronson, *The Traditional Tunes of the Child Ballads*, I (Princeton U. P., 1959) には伝承旋律は載っていない。
 18. John Ward, “Music for *A Handefull of Pleasant Delites*,” in *Journal of American Musicological Society*, x (1957). Helena Mennie Shire, *Song, Dance and Poetry of the Court of Scotland under King James VI* (Cambridge U. P., 1969, p. 164) より引用。
 19. Maria Leach (ed.), *The Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend*, I, 1949, s. v.

- Greensleeves.
20. もとは “hundred psalms” (100 の讚美歌?) であるが, “Hundredth Psalm” となおしてある版が多い。「詩篇 100 番」をもとにして William Kethe が書いて 1563 年に出版された “All people that on earth do dwell” (『讚美歌』第 4 番「よろずのくにびと, わが主にむかいて」) をシェークスピアは多分念頭においていたであろう。これは “Old Hundred(th)” として有名な曲であり, 詳しくは Fuld, p. 314; 斎藤勇『讚美歌研究』研究社, 1962, pp. 122-23; Maria Leiper and Henry W. Simon (eds), *A Treasury of Hymns* (Cornerstone Library, 1953), p. 132 など参照されたい。
21. はっきりとそう言っているのではないが, “A popular ditty, app. of a wanton nature” (Richard John Cunliff, *A New Shakespearean Dictionary*) あるいは “apparently a lascivious song” (Alexander Schmidt, *Shakespeare-Lexicon*) などという注記をみると, 曲ではなく歌詞の内容を対比させて解釈しているらしい。
22. 歌よりも管弦楽曲 (たとえば, R. Vaughan Williams, *Fantasia on Greensleeves* とか Mantovani 楽団のもの) にこの傾向が強いようだ。
23. Fuld, p. 216.
24. Dowland 作曲の合唱曲「今こそ別れの時」(Now, O now, I needs must part) (1597) あるいはこの曲を下敷きにして Thomas Morley が作曲した器楽曲「蛙」(Frog) (1599) の一部も多分 “Greensleeves” の旋律であろう。
25. Chappell, I, p. 230.
26. William Ballet 版と言っているものは, Chappell, p. 230; Reginald Nettle, *A Social History of Traditional Song* (Phoenix House, 1969), p. 103; Frank Howes, *Folk Music of Britain—And Beyond* (Methuen, 1969), p. 160; John Murray Gibbon, *Melody and the Lyric* (n. d.; rpt. Haskell House, 1964), p. 53 にある。
27. Chappell, I, p. 232.
28. *The Beggar's Opera* の楽譜については Edgar V. Roberts 編 (Edward Arnold, 1968) を参照されたい。なお Dover 社版には楽譜の初版が復刻されている。
29. 特に後半に相違が大きい。
30. 特に系統だてて集めたものではないが, 手元にあるもののうち比較的最近発行されたものを選んだ。なお, 以下の注においてはその編著者名のみで, 頁は省略する。
- (1) Leslie Woodgate, *The Puffin Song Book*. Penguin Books, 1956.
- (2) William Cole, *Folk Songs of England, Ireland, Scotland and Wales*. Charles Hansen, 1961.
- (3) Elizabeth Poston, *The Children's Song Book*. Bodley Head, 1961.
- (4) Tom Kines, *Songs from Shakespeare's Plays and Popular Songs of Shakespeare's Time*. Oak, 1964.
- (5) James F. Leisy, *The Folksong Abecedary*, Hawthorn, 1966.
- (6) Milton Okun, *Something to Sing About!* Macmillan, 1968.
- (7) Frederick Noad, *The Guitar Songbook* Collier Books, 1969.
- (8) Donald Mitchell and Roderick Biss, *The Faber Book of Children's Songs*. Faber, 1970.
- (9) *The Richard Dyer-Bennet Folk Song Book*. Simon and Schuster, 1971.
31. Rollins が Crossley 版, Arber 版, Park 版との異同を比較した表にはのっていないので, これらの版は HPD と同じで “my” がないものとみえる。なお “lady” は大文字のものも少なくないが, 「我が恋人グリ

- 「グリーンスリーブズ」として小文字にしておくのが自然であろう。
32. これは Dyer-Bennet のものである。職業歌手として意図的な変更を加えたものと推察される。
33. この経緯については Rollins の “Introduction” を参照。
34. ただし OED では *Roxburghe Ballads* (1887) VI, 398 から引用したと断わってはいる。
35. William Cole.
36. Dyer-Bennet はこのことについて “I find the whole meaning quite adequately stated in the first verse, which is all I give here” (p. 86) と言う。
37. Milton Okun.
38. Leslie Woodgate; James F. Leisy; Donald Mitchell and Roderick Biss.
39. Woodgate.
40. Frederick Noad
41. Okun; Dyer-Bennet.
42. Tom Kines.
43. Cole. これは明らかに誤植の引き継ぎである。
44. 事実、「グリーンスリーブズ」は有名な歌にもかかわらず民俗学的なイギリス民謡集 (たとえば Peter Kennedy, *Folksongs of Britain and Ireland*, Cassell, 1975; Ralph Vaughan Williams and A. L. Lloyd, *The Penguin Book of English Folk Songs*, Penguin Books, 1959) には収録されない。
45. David Herd, *Ancient and Modern Scottish Songs: Heroic Ballads etc* (1776; 1869; rpt. Scottish Academy Press, 1973), I, p. 221 には “Green Sleeves” と題して作者名を挙げずに歌詞のみが収められている。この標題も正確には “To the tune of ‘Green Sleeves’” というこ
- ある。なおこの曲と歌詞は James Johnson, *The Scots Musical Museum* (1853; rpt. Folklore Associates, 1962), I, p. 402 にある。
46. Thomas Percy, *Reliques of Ancient English Poetry*, ed. by Henry B. Wheatley (1853; rpt. Dover, 1966), II, p. 131.
47. J. Johnson, *SMM*, II, p. 244.
48. James Boswell, *The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson* (1785; Dent, 1909), p. 213-14. なお Chappell, I, p. 232 にも引用されているが、大文字の使用に違いがあり、第2連には誤記(誤植?)がある。
49. James Kinsley (ed.), *The Poems and Songs of Robert Burns* (Oxford U. P., 1968), III, p. 1325 より引用。
50. J. Kinsley (ed.), *op. cit.*, I, p. 501; J. Kinsley (ed.), *Burns: Poems and Songs* (Oxford U. P. 1969), p., 398. これらには楽譜もある。
51. これらの楽譜は Frank Howes, pp. 161-62 にある。また “O Shepherd, O Shepherd” は R. Vaughan Williams and A. L. Lloyd, *The Penguin Book of English Folk Songs*, pp. 74-75 にも収録されている。なおこの他にも、B. H. Bronson, *The Traditional Tunes*, I, p. 164 に一部分似た歌 (“There was a Squire of High Degree”) がある。
- 〔追記〕 pp. 87-88 で紹介した「元旦のCarol」および「この子は誰だろうか」は、それぞれ「古いものはみな」(152番) および「みつかいうたいて」(216番) として『讚美歌第二編』(日本基督教団出版局, 1967) に収録されている。クリスマスの頃に「グリーンスリーブズ」が聞かれるのは特に後者の歌詞と結びつけられているからである。